

「住吉法楽千句」考

松本 麻子

Considerations on the Sumiyoshi Hōraku Senku

MATSUMOTO, Asako

要旨

本稿は大永元年（1521）11月に張行された「住吉法楽千句」の特徴を明らかにした論である。この千句は三条西実隆と連歌師宗碩の両吟によるもので、親しい両者が互いに遠慮することなく実力を発揮した作品である。句どうしの関係が明白でなく難解で次のような特徴がある。『伊勢物語』『源氏物語』を本説とした句が複数見られるが、典拠がすぐに判明しないよう句作されている。実隆も宗碩も難解な前句の典拠を理解し当意即妙に句を付けていた。『雪玉集』『再昌草』にのみ見られる和歌表現を用いたものもあり、実隆は新規な表現を用いて句作しようと試みていた。宗碩は、勅撰集のみならず『延文百首』『永享百首』所収の和歌も正確に引用していた。さらに、宗祇ら先人たちの連歌表現を用いている句もあった。千句完成後、後柏原天皇が懐紙を閲覧したとあり、どのように句が付いているのか、第三者が読み解く楽しみもあったことを考察した。

キーワード

「住吉法楽千句」、千句連歌、三条西実隆、宗碩

Abstract

This paper presents a clarification of the characteristics of the Sumiyoshi Hōraku Senku, held in November of the first year of the Daiei imperial era (1521). Sanjōnishi Sanetaka and Sōseki, a rengashi (professional renga poet), read their Senku at this gathering. These two poets were very close, open, and frank with each other, and it can be said that these works demonstrated their superior abilities. The relationships between each of the verses in the Sumiyoshi Hōraku Senku are difficult to interpret and understand, and their sources are not apparent at first glance. Within his renga verses, Sanetaka employed waka-style poetry expressions he had used in his personal poetry collections, Setsugyokushū and Saishōsō. Sōseki correctly used waka poetry expressions from Chokusenshū (imperial commissioned anthologies of waka poetry) and the Hyakushū Waka (100 waka verses) used for the compilation of Chokusenshū. There were also verses in these Senku that used renga expressions of previous poets, including Sōgi. After finishing the Senku reading, it is said that the Emperor Go-Kashiwabara perused the kaishi (sheets of paper on which were written the Senku poetry); one of the amusements after the reading was to have persons other than the poets make interpretive readings as to how the verses were interrelated.

Key words

Sumiyoshi Hōraku Senku, Senku Renga, Sanjōnishi Sanetaka, Souseki

はじめに

三条西実隆と連歌師宗碩の両吟による「住吉法楽千句」は、大永元年（1521）11月1日から4日にかけて行われた。宗碩によって継承された宗祇の草庵種玉庵にて、実隆を招き張行されたことが『実隆公記』に記されている。執筆は周桂・永閑・等連らが務めた。追加には宗碩に師事した宗牧も参加している。京都大学附属図書館蔵平松文庫本（平松甲本）「住吉法楽千句」の奥書には、

今月（大永元年十一月）朔始綴二百韻、二日三百韻、三日二百七十句、四日二百三十句、及夜更終一会之功¹

とあり、『実隆公記』に「一日、己酉、晴、向宗碩庵、住吉法楽千句連歌両吟興行、今日百二韻」²とあることと矛盾しない。11月5日には、「今朝懐紙一見、朝浪後入風呂、帰宅之次参入

江殿、及昏宗碩法師称礼一荷兩種携之」とあり、完成した千句の懐紙を確認していることから、1日から4日まで千句が張行されたことは明らかである。

さらに『実隆公記』9日の記事に「千句懐紙自御所被返下、一昨日進上」とあり、すぐに実隆がこの懐紙を後柏原天皇に進上したと記されている。天理図書館蔵綿屋文庫本「住吉法楽千句」などには、奥書に後柏原天皇の千句連歌披露に対する礼を述べた女房奉書が載る³。

以前、この千句の特徴を「『住吉法楽千句』の技」（『俳文学研究』⁴）として短く述べた。実隆と宗碩という親しい二人が、互いに遠慮することなく実力を発揮した作品であるため、付け所を理解するのに苦勞する箇所も多い。また、斬新な転じや俳諧的な詠みぶりも窺えることなどが、この千句の特徴であると

指摘した。

拙稿では触れていないが、例えば四百韻には次のようにある。

- 84 おちぶれにける田舎わたらひ 同(堯空)
 85 うつろへば時うしなへる世もつらし 碩
 86 いつかといへる花は咲くらん 空⁵

84の身も落ちぶれた人のさまを詠む堯空(三条西実隆)の句から、85句で宗碩は田舎住みのまま時流に乗れず、いたずらに日々を過ごすことを嘆いていると応じた。86句で実隆は、85の「うつろへば」から縁のある語「花」を導き、いつかは花も咲くだろうと続ける。84の句から宗碩は須磨に流された光源氏を想起し、「いつかまた春の都の花を見ん時うしなへる山がつにして」(須磨)⁶の一部「時うしなへる」を用いた。実隆は宗碩の企みを理解したようで、86ではこの歌の上五「いつかまた」の「いつか」を取り入れている。本歌は山賤の身のままで「花を見ん」とするが、ここでは時機を失ったと嘆く人に対して、いつか「花は咲くらん」と慰める内容になる。

不遇な身の上を詠む句や、流浪する人のさまを詠む句に、上記と同じ『源氏物語』の須磨巻を連想して句を付ける例は極めて多い。しかし、宗碩のように「時うしなへる」のような、本歌の中でも特徴のない詞を用いることは稀である。例えば、「身のほど知れば恨みだにせず(宗松) / つらき世に須磨の山柴折りたきて(忍誓)」(宝徳四年千句・第四百韻・12/13)⁷などの例に見られるように、多くは「須磨」という語を直接用いている。また、須磨巻では、よく知られた源氏が都を思いやって詠んだ「恋わびて泣く音にまがふ浦波は思ふ方より風や吹くらん」を本歌とする例が目立ち、例えば、

- 泣く音あらはに聞く人もなし
 風だにも思ふ方より吹きは来て 専順

(竹林抄・恋連歌下・827)⁸

などのようにある。連歌七賢と称された専順であっても巧まずに「風」「思ふ方より」「吹き」といった用語を用い、はっきりと本歌がわかるように付けているのである。

もちろん、本歌を用いた付けかどうかについては後の読者には不明なことも多い。右の専順の付けのように、あからさますぎる本歌取は宗祇の時代には敬遠された面もある。ただし、「住吉法楽千句」では、実隆・宗碩ともに一目でそれとわかる詞を用いてはおらず、むしろ、あえてわかりにくい箇所を引く本歌取をしているようである。一見しただけでは何が典拠であるか不明な句も多い。あたかも、知識と経験の豊富な二人が、互いに句の付け所を理解できているか、相手に問うような箇所が見受けられるのである。

本稿は、このような「住吉法楽千句」に詠まれている句の特徴を探り、実隆や宗碩の連歌の手法について明らかにするものである。

1. 「住吉法楽千句」と本歌取・本説取の姿勢

宗祇は「六帖・夫木などのことなる歌をもて人をおどしなんとするは、口惜しきことなり」(『長六文』)⁹として、『新撰六帖題和歌』や『夫木和歌抄』などに見られる変わった歌を付合の典拠に用いることを戒めた¹⁰。同じく『長六文』で「人も聞きも知らぬことを好みて」句を付けることも「返す返す口惜し」としている。奇を衒った言葉や人のよく知らない和歌を本歌として用いれば、他の参加者は句の意味もわからず次の句を付けることも難しくなり、座の楽しみも失われる。

確かに、先に見たように「住吉法楽千句」では『源氏物語』須磨巻に見える和歌が本歌として用いられていた。ただし、実隆と宗碩は、著名な作品を典拠として用いるものの、あえて有名な箇所やよく知られた和歌を用いて句作することを回避している。後述するが、一般的な本歌取のように一首から取り入れることをせず、詞書や物語の地の文を含めた広範囲から詞を取り入れて句を詠んでいる。そして互いにそれを読み解きながら句を付けているのである。実力の伴う二人の両吟であるという点も大いに関係があるだろう。

「住吉法楽千句」第五百韻には次のようにある。

- 71 末知らず思ひ染め川渡るなよ 碩
 72 まことなけれど名をたはれ島 空

この付合は『伊勢物語』六一段を典拠としたもので、これは筑紫に出向いた色好みと知られる男が女に「染河を渡らむ人のいかでかは色になるてふことのなからむ」と詠み、女が「名にし負はばあだにぞあるべきたはれ島波の濡衣着るといふなり」¹¹と返したという内容である。71で「思ひ染め川」と詠まれた句に、この六一段を典拠として「たはれ島」と応じた付けは特に難解さもない。この箇所を本歌に用いた付けは、

3322 うき濡れ衣をいつか干すべき

3323 言の葉にたはれしまてを名の立て

(園塵第三・恋部)¹²

444 定めえぬ仲の名のみやたはれ島

445 うき濡れ衣もよしやわが着ん

(那智籠)¹³

などがある。兼載の句集『園塵』の付合も、宗長の『那智籠』のものも、女の歌「名にし負はばあだにぞあるべきたはれ島波の濡衣着るといふなり」を本歌にしている。しかし、「住吉法楽千句」は、色好みの男の歌が71の本歌であり、女の歌が72の本歌であるという点に大きな相違がある。このような一つの場面の贈答歌を一首ずつ、前句と付句の本歌とする連歌の付け様は極めて珍しいと言える。

第七百韻にも、『伊勢物語』八二段を本説とした付けがある。

11 桜がりその木のもととは問ひ捨てて 碩

12 渚の家の春をかも見ん 空

これは「渚の家」で、惟喬親王と業平たちが桜のもとで遊ぶよ

く知られた話である。宗碩は11で桜狩りのために訪れた満開の花の木のもとを、捨てて立ち去るさまを詠んだ。花の木からは離れたい、帰りたくないと思ふのが和歌や連歌の本意である。実隆は八二段に「(桜の) 木のもとに下りゐて、枝を折りてかざしにさして」遊んだあと、「その木のもととは立ちて帰る」とある一節から、12の句を付けたと思しい。なぜ花の木の下を立ち去ったかという、「交野の渚の家、その院の桜、ことにおもしろし」(『伊勢物語』)であるからだと思じたのである。

この段では業平の歌「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」が度々連歌の本歌にも用いられた。例えば、宗祇の『老葉』(再編本・春連歌)には、

97 春の心は古への色

98 岡の辺の渚の桜花咲きて¹⁴

とあり、前句の「春の心」から宗祇は「渚の桜」と応じている。「住吉法楽千句」のこの付合と『老葉』を比較した場合、大きく違う点は前句にある。「春の心」という、著名な業平詠を想起させる詞が含まれていれば、宗祇の「渚の桜」という表現も理解しやすい。一方、宗碩の「桜がりのためにその木の下は捨ておいていく」という句に実隆はもっとすばらしい「渚の家の春」を見に行くためと付けた。本説をふまえつつ内容は違っている。『伊勢物語』を幾度も書写し読み込んだ実隆ならではの付けである¹⁵。

『源氏物語』を用いた句にも同様のことが言える¹⁶。第七百韻には、

72 春の御殿ぞ玉を敷きたる 空

73 新しき年を迎ふるこの朝 碩

72の句は初音巻の最初「いとど玉を敷ける御前は、庭よりはじめ見どころ多く」に拠る。この「御前」は源氏の住まいである「御殿」であり、「春の殿の御前、とりわきて、梅の香も御簾の内の匂ひに吹き紛ひて、生ける仏の御国とおほゆ」と描写されている。この箇所を初音巻であると理解した宗碩は、73句で「新しき年」と応じた。初音巻は「年たちかへる朝の空のけしき」とあるように、正月の場面だからである。玉を敷き詰めたような「春の御殿」から、初音巻と祭した宗碩も、『源氏男女装束抄』や『源氏物語』注釈書「宗碩抄」¹⁷の作者にふさわしい詠みぶりであると言えよう。

2. 『雪玉集』『再昌草』と「住吉法楽千句」

「住吉法楽千句」が張行された大永元年、実隆は67歳であった。実隆は宗祇より古今伝授を受け、宗祇没後も肖柏・宗長・宗碩ら連歌師たちと親しく交わり、自らも多くの連歌会に参加している。和歌のみならず連歌にも深く通じていた実隆が、極めて親しい間柄の宗碩と詠むこの両吟には、彼の連歌表現の特徴が顕れていると指摘できる。特に、現存する和歌連歌にはあまり見られない表現であるものの、実隆の家集『雪玉集』や『再昌

草』に見える歌と類似した表現が用いられているものがあり注目される。

第一百韻

60 前行く水も冬寒き里 碩

61 千鳥なく袖の水やいかならし 空

61の句のように「袖の水」と「千鳥」を結ぶ歌例は『壬二集』に「故郷を思ひあかしの波枕袖の水に千鳥なくなり」(2589)¹⁸などもあるものの極めて少なく¹⁹、『雪玉集』に2首詠まれている点が注目される。「寄千鳥恋」として「しきわぶる袖の水を思ひやれ来ぬ夜の月に千鳥なく空」(5932)や、「冬夜恋／ふけにけり思ひかねてもいかならん袖の水に千鳥なく空」(6850)がある。特に後者は下線部のように61句と詞の用い方がほぼ一致している。

第一百韻

78 憂きふしまでも形見ならずや 空

79 絶え間多きその数々に手を折りて 空

第一百韻の78・79はともに実隆の句である。前の77句は宗碩の「都にてありしを語る草枕」で、78ではその旅寝のつらさを恋の「憂きふし」と転じ、恋人の訪れない侘しい独り寝の思い出さえ形見となると付けた。79句では、夜離れしがちな恋人の、訪れない日数を指を折って数える女のさまを詠んでいる。「手を折りて」と「憂きふし」を結んだ歌例は少ないが、そのほとんどは『源氏物語』帯木巻の雨夜の品定めで詠まれた「手を折りてあひみしことを数ふればこれひとつやは君が憂きふし」を本歌としている。

この『源氏物語』を踏まえた歌は『雪玉集』に次のようにある。

手を折りて言ひもやせまし憂きふしの一つ二つを限りなりせば (3551)

つらい独り寝が指で数えられるくらい、一晚二晩だけであるのなら、男に恨みごとを言ってみるのだけれど、あまりにも多い日数のためそれすら言うことはできない、という意であろう。本歌である『源氏物語』の歌は「指喰いの女」との別れの場で馬頭が詠んだものでありやや俳諧めいている。表現はそのままに恋の心情を詠んだ実隆の和歌は、この78・79の付合と類似した内容である。

続く80句は、宗碩の「ながめしはてやよその夕暮れ」である。「ながめしはて」という言い回しは、『再昌草』に「いたづらにながめしはてや雪の暮花よ月よと送り迎て」(3241)とあるものの、他には和歌連歌に見られない表現である。これは「住吉法楽千句」より前の、永正13年(1516)12月に詠まれた歌である。あるいは宗碩も続けて実隆特有の表現を使ったのではないかと推測される。

第二百韻

43 声も色に匂ふ青柳桜人 空

43句の「句ふ青柳」の言い回しは、後崇光院の和歌に一首²⁰見られるものの、その他には和歌・連歌に見られない表現である。これも『雪玉集』に「枝かはす梅の花笠おのづから縫ふてふ糸や句ふ青柳」(5355)とある。

第二百韻

89 今さらの憂き身いづくにあくがれん 碩

90 いとひ捨つとも慕ひこそせめ 空

90の実隆の句「いとひ捨つ」は、数は少ないものの『続古今集』には「憂き世とていとひ捨ててもいかがせん背かぬだにも数ならぬ身を」(雑歌下・1851・藤原良教)などと釈教歌として詠まれ、歌例が散見される。『雪玉集』には「いとふなよいとひ捨つとも今さら」に立ちにし名をばとりもかへさじ」(3125)とあり、89・90の付合と用語が類似する。また、89句の、今さらあらためて「憂き身」だと思っても、どこにさまよい出ようかと詠む句に、90句で実隆は、嫌がり捨てたとしても、あなたを慕うこととしよう、と恋の面影のある句に取りなしている。『雪玉集』の歌も、この世を嫌だといって捨てたとしても、浮名が立った今としては、人の口にのぼることはなかった昔の名を取り返すことなどできないのだから私を嫌がりなさいますな、という恋の歌であり、本付合と類似した趣向と見なせる。

第四百韻

94 起きて涼しくそそく暁 碩

95 はかるべき塵なき山の庵しめて 空

95の「塵なき山」とは、堯恵が「誰か来て浮世の袖をはらふらん塵なき山の苔の岩橋」(下葉集・671)と詠んでいるように、俗塵から遠ざかっている山という意であろう。この表現も和歌・連歌例には、堯恵詠の他、肖柏の歌例²¹にのみ見られるものである。実隆は三首「塵なき山」を詠んでおり注目される。特に「納涼／閑にて塵なき山の涼しさはすめる心や水の水上」(5693)が本付合の参考になる。歌題に「納涼」とあるように、94句の「起きて涼しく」から自身の歌のように「塵なき山」を導いたのであろう。

第九百韻

23 春秋と旅のよそひを送りきて 空

「旅のよそひ」とは旅装束のことで、「又の日、総州旅のよそひとて夏衣おくられ侍るにそへて」(閑塵集・302詞書)などとある。この表現を歌に取り入れたものは、「逢坂の花とぞ見ゆる閑屋よりこぼれ出たる旅のよそひは」(再昌草・5407)以外、管見に入らない²²。ただし、これは大永8年(1528)2月に詠まれたもので、この「住吉法楽千句」が先行している。この千句で用いた表現を、後に自身の歌に取り入れた。このような例も確認できる。

以上、実隆を中心に『雪玉集』『再昌草』所収の歌の表現との類似を見てきたが、ここに挙げたものは他に例の少ない、もしくはない、特徴的な言い回しを用いた連歌例である。他にも

「住吉法楽千句」の中に『雪玉集』『再昌草』所収歌と共通する詞を用いた句は多く見られる。ただし、実隆は出座する連歌会で詠んだ句に、毎回『雪玉集』『再昌草』の言い回しを用いているわけではない。聞き慣れないめずらしい表現は、次の句を詠む人にとって句作の妨げになることが予想されるからである。例えば『新撰菟玖波集』に収められた実隆の句は31句であるが、『雪玉集』『再昌草』の言い回しを用いたと推測される句はない。

1056 山里寒く衣打つ声

1057 白妙の霜夜の月に秋ふけて 権大納言実隆²³

(秋連歌下)

この付合のように、よく知られた「御吉野の山の秋風さよふけて故郷寒く衣打つなり」(新古今集・秋歌下・483・飛鳥井雅経)を本歌とし、「秋ふけて」と応じている。連衆が十数名からなる一般的な百韻では、先に示した宗祇の言のように変わった歌集から表現を用いることは禁じ手であった。ましてや自身の家集にのみ用いられている表現を連歌に使用することは通常では考えられることではない。

「住吉法楽千句」から3年後の大永4年(1524)3月に張行された、実隆・宗長・宗碩の三吟の「伊庭千句」では『雪玉集』『再昌草』の表現を用いる、類似した傾向が見られる。

第九百韻

84 月を添へばや水もかけよし 雪(実隆)²⁴

84句の「月を添へばや」という表現は、大永元年に詠まれた『再昌草』の「結ぶ手に月を添へばやまし水はただ涼しさを光ながらに」(4010)の他、見あたらないものである。「伊庭千句」も実隆と懇意にしている連歌師宗長と宗碩との三吟の千句であり、新しい表現を千句で試している点が「住吉法楽千句」と共通している。同じく「伊庭千句」には次のような句もある。

第三百韻

65 霰ふる今宵や冴えつ冴えざらん 長(宗長)

66 深山の嵐吹きかへる声 雪

65句の「霰ふる」と66句の「深山の嵐」を結んだ歌例は、『続後拾遺集』に「雲深き深山の嵐冴え冴えて生駒の岳に霰ふるらし」(冬歌・477・源実朝)とあり、本付合と類似した趣向で本歌と見てよい。ただし、霰の降る「深山の嵐」を詠んだ歌はこの実朝詠の他、『雪玉集』に「夢よいかにか頼む枕は笹の葉の深山の嵐霰ふる夜に」(3406)とあるだけである。実隆が霰ふる「深山の嵐」のような、これまでに使用されていない新しい表現を勅撰集から見つけ、自身の和歌や連歌で使用していると指摘できよう。「伊庭千句」の特徴については、稿を改めたいが、実隆が気のおけない者と臨んだ「住吉法楽千句」や「伊庭千句」では、『雪玉集』『再昌草』に見える、これまでに例を見ない表現を積極的に用いている、ということが言えるのである。

3. 宗碩の表現

宗碩は連歌用語集『藻塩草』を編纂し、証歌として膨大な和歌を整理し引用した。勅撰集から名所の歌を抜き書いた『勅撰名所和歌抄出』もある。その豊富な知識は前述したように『源氏物語』注釈にも結びついている。ただ、実隆とは違い宗碩の家集は現存していない。「住吉法楽千句」で宗碩は、特定の歌集に見える表現を多く用いているということではなく、むしろ、これまで詠まれた様々な和歌の表現を極めて正確に用いている点に特徴がある。一日平均三百句を詠む千句連歌は百韻連歌と相違し、一句を詠む際にかなり短い時間で句作しなければならぬ。このため一般的な百韻連歌より工夫された複雑な付け様は少ないということが指摘できる²⁵。どのような句を付けようかと時間をかけて思案できない千句連歌では、自身の記憶にある和歌をその場で瞬発的に詠む必要がある。宗碩も『長六文』で「千句に会ひ候ふ時は、覚え候ふ所を、別に心を遣らずして、その句の仕立てをよくよく見て」詠むのがよいと記している。このような千句の座で宗碩は非常に正確な詞の引用をしており注目される。

以下、用例を確認したい。

第五百韻

54 やがて出でじの山は山風 碩

55 散りにけり何ぞは花の跡も見ん 空

54句は『新古今集』に見える西行の「芳野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ」(雑歌中・1619)の詞を用いた句である。よく知られた歌であるが、実は54句のように「やがて出でじ」の表現をそのまま取り入れた連歌例は確認できない。他に、例えば「花散りなば」の例もなく、このような著名な和歌であっても、表現をそのまま連歌に取り入れることは容易ではなかったことが伺える。

第七百韻

44 物あらがひを問おとさばや 空²⁶

45 蓮葉の上は隠すをさはりにて 碩

『後撰集』(恋五)には次のようにある。

消息はかよはしけれど、まだ逢はざりける男を、これかれ逢ひにけりと言ひさわぐを、「あらがはざなり」とうらみつかはしたりければ

蓮葉の上はつれなき裏にこそ物あらがひはつくといふなれ
(903・よみ人しらず)

宗碩は44句の「物あらがひ」から、この『後撰集』歌を想起し「蓮葉の上」を導いた。『後撰集』に入る歌であるため、宗碩がこれを覚えていた可能性は高い。しかし、宗碩は勅撰集ではない和歌からも正確に詞を引いていることが次の句からわかる。

第六百韻

4 夕影寒く秋やふけぬる 空

5 衣うつつちの響きにすみのほり 碩

「つちの響き」という表現は極めて珍しく「住吉法楽千句」までの用例は2例のみ確認できる²⁷。5の発想は藤原家隆の歌に拠るものと思われる。「さえのぼるつちの響きに夜や寒き衣雁がね空に鳴くなり」(壬二集・1070)の歌題は「擣衣」であり、5句の「衣うつ」と合致する。家隆詠の「さえのぼる」を宗碩は「すみのぼる」とするなど工夫も見られるが、この歌が念頭にあったことは指摘してよいだろう。

第七百韻

5 ほのかにも螢の渡る夕まぐれ 空

6 葉末見えつつ高き夏草 碩

5句の「螢」から宗碩は『新後撰集』「夏草のしげみの葉末暮るるより光みだれてとお螢かな」(夏歌・239・西園寺実俊)、または『嘉元百首』の「螢／吹きわたす野風になびく高草の葉末づつひに行く螢かな」(824・藤原実泰)を典拠としたのだろうか²⁸、この付合も宗碩が和歌の詞をそのまま引いていることがわかる。

第一百韻

36 夜は残りある手枕の雨 碩

37 つれづれと守る灯火ややつきて 碩

37句に詠まれる「つれづれ」と「灯火」を結んで詠まれた歌は『延文百首』に「夜灯」として詠まれた「つれづれと窓うつ雨の音深けて残るもさびし闇の灯火」(2792・足利義詮)に見える。下線部が本付合と詞が一致しており、宗碩がこの歌を意識している可能性は極めて高い。

第三百韻

20 常世ゆかしく雁帰るなり 空

21 限りなき霞の遠のわたの原 碩

21句の「霞の遠」という言い回しは少なからず詠まれているが、「雁」と結んだ歌例は少なく、これも同じ『延文百首』に「帰雁」として「春の雁霞の遠にたち帰る心もさこそへだてはつらめ」(3111・藤原為遠)とある²⁹。

第五百韻

16 鶴の千歳を祝ふ行く末 空

17 和歌浦や心を松にことよせて 碩

16句の「鶴の千歳」と17の「和歌浦」と「松」を結んだ歌例は、『永享百首』「和歌の浦の松にむれゐる友鶴の千歳とよばふ声ぞのどけき」(945・二条持基)のみに見られるものである。下線部の詞が付合と一致しており、関係性が窺われる。

『延文百首』は『新千載集』の応制百首として、延文元年(1356)成立した。また、『永享百首』は永享5年(1433)に『新統古今集』の撰集資料として詠まれた百首である。この『永享百首』(945)と先に見た第五百韻54・55句に挙げた『新古今集』歌「芳野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ」(雑歌中・1619・西行)は、いずれも付合に詞が多く用いられている点で類似している。後者を本歌と呼ぶことにはためらいはない

が、前者の『永享百首』歌を本歌と見てよいのだろうか。それとも、詞の例の証拠となる証歌と見るべきなのだろうか。一条兼良の『連歌初学抄』（宮内庁書陵部本）には「本歌事」として「本歌と云は前句の付合也。証歌と云は詞づかひ、一句のしたて也。本歌といふも、猶心々有るべし」³⁰とあり、付合つまり二句に跨がって詞が用いられていれば本歌であると説明しているが、この基準は非常に曖昧である。

そもそも『永享百首』や『延文百首』は、連歌論では本歌と見なされない。二条良基の『僻連抄』（式目）に、

新古今以来の作者、用ゆべからず。本歌は堀川院百首の作者までを取るべし。また、近代の勅撰たりと雖も古人の歌をば取るべし。証歌には、近代の人の歌をも引くべきなり³¹。

とある。良基の時代であるため「近代」は『続後拾遺集』（正中3年〈1326〉撰進）の頃までを示すようだが、本歌・証歌ともに宗碩が用いたと思われる『壬二集』や『延文百首』などは入らない。先に見た兼良の『連歌初学抄』（宮内庁書陵部本）も同様の記載があり、「人のあまねく知らざる歌をば、付合に之を好み用ゆべからず」といった注意もある。

この規定は宗碩の時代になっても変わらない。宗碩に師事した宗牧の連歌論『当風連歌秘事』には、

本歌は新勅撰より以来拾代集まで用ゆべし。作者は、三代集のほかこれ取るべからず。委しくは詠歌大概を見るべしと、先達も掟て待れば、なほもつてこの旨を背くべからざるか³²。

とある。本歌は『新勅撰集』から「拾代集」つまり十番目の勅撰集『続後撰集』までなら用いてもよく、連歌であっても和歌の本歌取を定めた『詠歌大概』と同様の考え方をすべきだと「先達」も述べていると宗牧は記す。

宗碩の用いたと思しい『延文百首』『永享百首』は、これを本歌または証歌と見てよいかどうか、慎重に検討すべきであろう。だが、先に確認した『雪玉集』『再昌草』と同様、「住吉法楽千句」が互いのことを理解しつくした両吟の千句であったために、宗碩も一般的な連歌では本歌や証歌とはしない歌を多く引いていたと見なせる。そして、勅撰十代集には載せられていない歌であっても、正確に句に反映させることのできる宗碩の、連歌師としての実力も窺い知ることができるのである。

4. 「住吉法楽千句」に引かれた連歌

ここまで、実隆と宗碩の句の和歌における表現を確認したが、宗祇ら先人の連歌表現を取り入れている句について検討したい。「住吉法楽千句」を調査すると、連歌七賢や宗祇ら、実隆・宗碩が学んだ連歌師たちの句の表現を取り入れていることがわかる。宗祇以降の連歌作品については、研究の蓄積が少なく、今後の重要な課題であるが、連歌の表現に別の連歌作品が用いら

れているという指摘はない。先ほどから繰り返し述べているように、座の進行のため連歌論ではよく知られた作品、「古典」となった勅撰集や『伊勢物語』『源氏物語』を典拠とするように言われている。つまり、常識的に考えても過去の連歌の表現を引いて作句することはあり得ないのである。しかし、この「住吉法楽千句」では次のような例が見られる。

第二百韻

- | | | |
|---|----------------|---|
| 1 | さ夜時雨雲も干ぬまの朝日かな | 碩 |
| 2 | 落ち葉静まり月残る山 | 空 |

実際の句で詠まれた「月残る山」という表現は、和歌には見られないものである。例えば、「月残る槇の外山のあけぼのに光ことなる嶺の白雪」（新拾遺集・冬歌・664・西園寺実兼）などのように、「月残る〇〇山」という言い回しの歌例はいくつか確認できる。だが、連歌例には宗祇の句に「面影寒し月残る山」（老葉〈吉川本〉・冬・586）³³、「今朝も鳴け月残る山のほととぎす」（老葉〈再編本〉・1636）などがある。実隆は宗祇が度々用いた「月残る山」という表現を、自身の句にも使用しているということが言える。

第二百韻

- | | | |
|---|-----------------|---|
| 5 | 置きあへぬ小野の初霜冷ややかに | 碩 |
| 6 | 散るらん花の惜しき萩原 | 空 |

5句の「小野の初霜」という表現も和歌には見られないものである。これは、「文安雪千句」の第一百韻に

- | | | |
|----|----------------|------------------|
| 38 | 古枝に虫のすだく萩原 | 日晟 |
| 39 | うら枯るる小野の初霜色みえて | 行助 ³⁴ |

とあり、連歌七賢の一人である行助の句である。38句に「すだく萩原」とあるが、実隆は「惜しき萩原」としている。

第七百韻

- | | | |
|----|-----------------|---|
| 27 | 句へ梅いとまありせばかざしてん | 空 |
|----|-----------------|---|

の「句へ梅」と詠む例も連歌に見られる。「句へ梅夜半の戸ささぬ冬の庭」（専順等日発句〈伊地知木〉・365）³⁵、「句へ梅身にこそよその春の風」（下草・1267）³⁶、「句へ梅春やは遠き雪の窓」（自然斎発句・1552）³⁷など専順・宗祇の発句として詠まれている。宗祇に師事した実隆、宗碩がこの句を知らないことはよもや考えにくい。さらに、このような用例もある。

第三百韻

- | | | |
|----|----------------|---|
| 75 | あだ人は千々の一つも好まめや | 碩 |
|----|----------------|---|

「千々の一つ」の表現は連歌師肖柏の家集『春夢草』に「今さらに千々の一つも恋しさのまじる涙はなにに落つらん」（484）と見られるのみである。この表現を宗碩は自身の句集『月村抜句』でも用いている。

- | | |
|-----|-------------------------------|
| 427 | 心をくたくはていかげせん |
| 428 | いへばえに千々の一つのわが恨み ³⁸ |

肖柏と宗碩は何度も連歌会で同座をしていることは言うまでもない。「住吉法楽千句」の特徴として、連歌特に宗祇に用いら

れた表現をも、このように取り入れていると言えるのである。

おわりに

「住吉法楽千句」の特徴は、次のような付合にも現れている。

第五百韻

80 午の貝吹く空はほどなし 碩

81 おこたらぬ行ひしるき寺古りて 空

80句の「午の貝吹く」は午の刻に時を知らせるため法螺貝を吹くことで、『千載集』に「今日もまた午の貝こそ吹きつなれ羊の歩み近づきぬらん」（雑歌下・1200・赤染衛門）とあるに拠る。実隆はこの赤染衛門の歌を想起したようで、この歌の詞書「山寺に詣でたりける時、貝吹きけるを聞いて詠める」から、81句で修行を怠ることのない古寺のさまを付けた。宗碩と比較すると、本歌の詞をそのまま用いてはいないが、詞書をもとに付けている点を実隆の技と見ることができる。

第七百韻

25 今日たつる荷前の使道遠み 空

26 年いそがはし暮らす宮人 碩

25句の「荷前（のさき、にさき）使」とは、調の絹・綿などのうちその年の初物を言い、朝廷から伊勢大神宮をはじめとした諸陵墓に奉るもので、12月にその使いを派遣する。「荷前の使」を用いた歌例は、同時代の歌人今川為和の集に「かきくらす雪をこつけにになひもて荷前の使ひ道急ぐらし」（今川為和集・1420）とあるだけである。特異な詞を詠み込む25句に、宗碩はその使いの送られる時期である年の暮れの宮人のさまを付けた。「いそがはし」は宗祇の師である宗碩や心敬が学んだ正徹の家集に「波ならぬ年も程なくこゆるぎのいそがはしきは都なりけり」（草根集・6384）などと詠まれている。

第十百韻

12 あひ思ひしも親さくる君 碩

13 言へばただ袖こそ色の浅緑 空

「親さくる君」を、『源氏物語』夕霧と雲居の雁との関係と見た実隆は、「くれなるの涙に深き袖の色を浅緑とや言ひしをるべき」（少女）と詠む夕霧の歌から、「袖こそ色の浅緑」と付けた。この典拠に気づいた宗碩は、次の14句で「問はばやいかに紫のゆへ」と「紫の上」を連想させる詞を出し、続けて実隆は「さぞな人心づくしの旅の道」と続けている。「心づくし」は「須磨」の一節「須磨には、いとど心づくしの秋風に」に基づいたものである。

このように、「住吉法楽千句」はこれまでの連歌作品とは様相を異にする。実隆と宗碩は、表現方法としては『雪玉集』『再昌草』、『延文百首』『永享百首』などの歌集から詞を取り入れ、連歌作品をも典拠に用いるなどして、新しい表現を目指したと思しい。もちろん、『伊勢物語』『源氏物語』など、連歌の規範に従った作品も典拠としている。しかし、その内容は直接的で

はないことは確認した通りである。

この「住吉法楽千句」は完成から4日後の大永元年（1521）11月8日に御所に届けられた（『実隆公記』）。論の始めに示した天理図書館蔵綿屋文庫本「住吉法楽千句」の奥書に載る、女房奉書は次の通りである。

この千句御らむぜられ候ておもしろき御きをさんじ候、まめやかにたぐひも候まじ事にて候、たれ人さたし候とも、どくぎんのほかには、きこしめし候はず候、返す返すおもしろき、とりどりに御らんぜられ候ばかりにて候、あひてになり候ものこのうみやうにてこそとおほしめし候へ

（以下略）

後柏原天皇は『新撰菟玖波集』に57句入集する連歌好士であり、多くの連歌会に出座した。同年9月19日には『源氏物語』の詞を各句に詠み込む連歌会を主催し、実隆の子公条もこの会に出座している。「住吉法楽千句」についての後柏原天皇からの礼状は書写されたもののため文意が取りにくい箇所もあるが、「独吟の他には聞こし召し候はず候」とは、何人が詠んだものでも、独吟の連歌の他はこれまでご覧にならなかったという意であろう。それなのにこの両吟千句が「返す返すおもしろき」ものであったのは、「相手になり候ふ者の功名にてこそ」と記されている。実隆の句はもとより宗碩の手柄による所が大きいとの評価であった。この「住吉法楽千句」の価値は、本稿が検討したように実隆と宗碩の付け様にある。

現代の我々は和歌や連歌のデータベースもあり検索も自在である。本稿では様々な資料を用いて、二人の句作の意図をようやく理解することができたのだが、はたして後柏原天皇はこの千句をどのように読んだのだろうか。これまで連歌師たちの作り上げた連歌作品がどのように読まれたのか、という観点からの検討はされていない。座の文芸である連歌は、詠むことにばかり焦点が当てられてきた。後からこの付合はどうして付けられたのか、本歌は何か、引き歌はどれか、このような連歌の楽しみ方も当然されたはずである。この点に関しては稿を改めて論じたい。

- 1 「京都大学蔵 貴重連歌資料集第三巻」（京都大学文学部国語学国文学研究室編、2004年、臨川書店）。巻末に「住吉法楽千句」の改題として阿尾あすか「『住吉法楽千句』の成立と伝本」が載る。また、「住吉法楽千句」に一部言及している論としては、高見早苗・田村純子・藤野節子「連歌師宗碩年譜稿」（『大妻国文』第9号、1978年3月）がある。
- 2 史料纂集『実隆公記』（2000年、続群書類従完成会）
- 3 「この千句御らむぜられ候ておもしろき御きをさんじ候、まめやかにたぐひも候まじ事にて候」（天理図書館蔵綿屋文庫本、れ4・2-28）。本稿後半にて言及する。
- 4 第68号、2017年10月
- 5 『住吉法楽千句』の引用は、『京都大学蔵貴重連歌資料集3』（前掲）による。読みやすさを考慮し、一部仮名を漢字にあて変え、送り仮名を加え、踊り字を仮名にした箇所がある。また、（ ）は引用者が補った。
- 6 『源氏物語』の引用は、以下すべて新編日本古典文学全集『源氏物語 1～6』（阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注、1994年～1998年、小学館）による。

- 7 古典文庫『千句連歌集三』（高橋喜一・藤本徳明・荒木尚・島津忠夫編、1981年）
- 8 新日本古典文学大系『竹林抄』（島津忠夫・乾安代・鶴崎裕雄・寺島樵一・光田和伸校注、1991年、岩波書店）
- 9 新編日本古典文学全集『連歌論集 能楽論集 俳論集』（奥田勲校注、2001年、小学館）
- 10 このことについては拙稿「寄合書と『夫木和歌抄』（『連歌芸芸の展開』2011年、風間書房）を参照されたい。
- 11 新編日本古典文学全集『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』（片桐洋一・高橋正治・福井貞助・清水好子校注、1994、小学館）
- 12 『連歌大観第二巻』（廣木一人・松本麻子編、2017年、古典ライブラリー）
- 13 『連歌大観第二巻』（前掲）
- 14 『連歌大観第一巻』（廣木一人・松本麻子編、2016年、古典ライブラリー）
- 15 実隆が大永2年（1522）に『伊勢物語』の講義を行い、聴講した清原宣賢がその内容をまとめた『伊勢物語惟清抄』がある。また、小山順子「三条西実隆における『伊勢物語』撰取と注釈」（『女子大國文』第166号、2020年1月）に、「勅撰和歌集に入集することも多い『伊勢物語』の作中和歌ではなく、地の文の詞を用いることは、実隆が地の文にまで精通していることを示す」という指摘がある。
- 16 実隆は幾度となく『源氏物語』を写したが、特に宮内庁書陵部蔵本の三条西家本はよく知られている。
- 17 「宗碩抄」は散逸し、宗碩に師事した永閑の『萬水一露』中に「碩」としてその内容が残る。
- 18 和歌の引用は『新編国歌大観』または『私家集大成』（古典ライブラリーデータベース）による。読みやすさを考慮し、一部仮名を漢字にあて変え、送り仮名を加えた箇所がある。なお、下線部は引用者による。
- 19 他に後鳥羽院の歌「風はやき阿武隈川の宵夜千鳥涙なそへ袖の水に」（後鳥羽院御集・1450他）がある。
- 20 「浅緑霞に匂ふ青柳の花にもあらぬ色ぞえならぬ」（沙玉集・228）
- 21 「一葉だにまじらぬ花はます鏡うかぶ塵なき山桜かな」（春夢草・885）、『雪玉集』1452・3688
- 22 後代の例としては、烏丸光広の家集『黄葉集』に「見るままによしさは曇れ鏡山旅のよそひのかけもはづかし」（1193）などがある。
- 23 『新撰菟玖波集全釈 第二巻』（奥田勲・岸田依子・廣木一人・宮脇真彦編、2000年、三弥井書店）
- 24 古典文庫『千句連歌集七』（荒木尚・島津忠夫・寺島樵一・鶴崎裕雄編、1985年）
- 25 松本麻子「千句連歌と寄合」（『連歌芸芸の展開』前掲）、松本麻子「千句連歌における「人の耳をもおどろかす」句」（『画期としての室町一政事・宗教・古典』前田雅之編、2018年、勉誠出版）。
- 26 「物あらがひ」という表現を用いた歌は『雪玉集』に「言はじただ物あらがひの憂き名さへ立ちそふともえやははるけん」（4617）とある。
- 27 「衣うつつちの響きの山彦は梢ぞやがて砧なりける」（建長八年百首歌合・676・寂西）
- 28 「螢」「葉末」「草」を詠み込む例は、他に頼阿の「秋近きこれや螢の思ひ草葉末の露に影ぞみだるる」（草庵集・374）などあるが、少ない。
- 29 歌例は、他に「春の日のなしかよひ路あとしあれば霞の遠に帰る雁がね」（道助法親王家五十首・172）、「軒近きつばめばかりにほのみえて霞の遠にきゆる雁がね」（卑懐集之外・15）などがある。
- 30 桂宮本、函番353-84
- 31 日本古典文学全集『連歌論集 能楽論集 俳論集』（伊地知鐵男校注、1980年、小学館）
- 32 日本古典文学全集『連歌論集 能楽論集 俳論集』（前掲）
- 33 貴重古典籍叢刊『宗祇句集』（金子金治郎・伊地知鐵男校注、1977年、岩波書店）
- 34 古典文庫『千句連歌集二』（奥田勲・両角倉一編、1980年）
- 35 『連歌大観第一巻』（前掲）
- 36 『連歌大観第一巻』（前掲）
- 37 『連歌大観第一巻』（前掲）
- 38 『連歌大観第二巻』（前掲）

〈付記〉本稿は平成30年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金課題番号：18K00286）の研究成果の一部をまとめたものである。